

※小平市森のカルテ作成準備委員会資料

※この資料は、審議中のため今後追加修正される可能性があります。

小平らしい森のまとめ

1 小平らしい森の概念

(1) 歴史的な価値

①小平の歴史

小平の歴史はそう古くまでさかのぼることはむずかしい。

ア 新田開発前は、ほとんどが人の住まない原野であった。

イ 平安時代は、村山党(宮寺・金子現在の入間市)・横山党(八王子付近)西党(日野市付近)武士団が形成されていた。

ウ 鎌倉時代は、武蔵国の源氏による検地と開墾が行われたが、水田化の不可能な武蔵野台地は、いぜんとして荒野のままであった。(町誌P10)

エ 室町時代から戦国時代にかけては、大石氏(あきる野市)三田氏(青梅市)が、武蔵野地方に勢力があった。(町誌P14)

オ 江戸時代から、徳川家による全国支配の基礎として関東が経営された。幕府は、物質的基礎である年貢を増やすために、荒地として放置されていた小平の原野を開拓させていった。武蔵野新田開発はその好例である。(町誌P22)

カ 小平市の礎となる小川村は、武蔵野の新田としては古い村である。1657年から小川村は開拓され、その後に開拓された小川新田、大沼田新田、野中新田与右衛門組、野中新田善左衛門組、鈴木新田、廻り田新田といった隣接の6つの新田村と明治22年4月1日合併して小平村となり、現在の小平市の礎となったものである。

(参考)

小平より古い新田開発は砂川村(立川市)新町村(青梅市)などである。(町誌P23)

② 新田開発時代の小平の姿

主に小川村について整理する。

ア 新田開発は、青梅街道と野火止用水、青梅街道と玉川上水をつなげる南北に長い整然たる短冊状の地割で行われた。この短冊の区画された一区画が1軒分の持ち地である。(町誌P63)

イ 小平は水が逃げやすい土地で水田には適さず、耕地はほとんどが畑で、初期の小川村の作物は、大麦・小麦・あわ・ひえ・芋・そば菜・大根が主要なものであった。農業に適しない土地なので、肥料は農民の重大関心事で、当初は肥料の原料も自由に近くの荒野から取ってくるのが認められていた

が、農業生産の高まりとともに、江戸からこやしを取り寄せるようになっていった。(町誌P71参考)

ウ 土質は、軽い赤土層であったため、少しでも強い風が吹けば表土は、濛々(もうもう)たる黄塵となって舞い上がっていたため、防風林としての屋敷森や防風垣が多い。特に小平は北西の風が強いため、屋敷森は家屋の西側と北側に多く配置されていた。また、畑の風食や地温及び植物の茎葉温の低下などを防ぐために東西方向に防風垣として畦畔(けいはん)茶園が十五間おきで配置されていた。(町誌P1125・1168・1171参考)

エ 屋敷は青梅海道沿いに位置させ、周囲を防風林として屋敷森で囲み、用水路は飲み水であったため、屋敷の勝手側に配置した。(小川村地割図本編P8～9)

オ 屋敷森に連続して、樹林地を配置し、剪定枝を燃料にしたり、落ち葉の腐葉土などを肥料にしたりしたと思われる。また地割の北端の野火止用水沿いと南端の玉川上水沿いにも樹林地を配置した。(写真 No3本編 P10、小川村地割図本編P8～9)

③ 武蔵野にある小平

ア 武蔵野とは古代の武蔵国を示すこともあるが、狭い範囲である武蔵野台地を捉えた場合は、西北は入間川の、東北と東とは荒川の、南は多摩川に囲まれた一つづきの台地が武蔵野の範囲となる。そして、武蔵野台地は地形面により、立川面・武蔵野面・下末吉面・多摩面の4つに分かれるが、小平は、武蔵野台地でもっとも広大な面積を占めている武蔵野面に位置する。

イ 武蔵野といえば、明治時代の文豪国木田独歩(1871-1908)の代表作『武蔵野』(1898年)に次のような有名な一節がある。

「昔の武蔵野は萱原(かやはら)のはてなきをもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といってもよい。すなわち木はおもに檜(なら)の類で冬はことごとく落葉し、春は滴(したた)るばかりの新緑萌え出ずるその変化が秩父嶺以東十数里の野一斉に行なはれて、春夏秋冬を通じ霞みに雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑陰に紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙はちょっと西国地方また東北の者には解しかねるのである。」

萱=茅

屋根をふく材料とする草。イネ科のススキ・チガヤやカヤツリグサ科のスゲなどの総称。

ウ 武蔵野の景観は、荒野であった土地を江戸時代初期からの新田開発により、人が手入れしていった自然の姿が主な要素となっている。特に小平は、多摩丘陵や狭山丘陵の里山とは違った、荒野を新田開発していった計画

的な地割による景観であり、屋敷森、雑木林、用水路、畑などの要素で構成された景観となっている。

④ 江戸時代の生活における森

ア 農民に対する幕府の年貢の取立が厳しく、農民は農事の合間に副業をしていた。村の明細帳には、「農業のほかに男は江戸へ炭・薪を運んで駄賃をとり、馬を持たないものは日雇となり、あるいは馬のくつ・わらじ等を作って渡世し、女は木綿布を織ってかせぎする」といった記述がある。(町誌P73)

イ 享保5年(1720年)の村のおきてには、盗伐罰金五百文、見逃した者は罰金一貫文などを書いてあることから、生産力をあげるために肥料として草木を盗みとる者がいたことがうかがわれる。このようなことから、芝地や樹林が貴重な農業資源として見ていた当時の生活が想像できる。

(町誌P77～78)

芝地

現在では、芝の生えた土地の意味になるが、新田開発の頃では、畑と山林の境に設けた樹木を植えない一定の幅(一間=1.82m くらい)の緩衝地帯のことをいった。(樹木の陰による作物への害を与えなくするために設けた)

ウ 「以前ではどこの家でも必ず1～2本のかしわの木を植えていたので、自分の家のかしわ葉を使ってかしわ餅を作った。」(町誌P1211)

エ 「子どもの頃の遊び、木の上に木を組んで基地を作りました。竹を利用して、用水路に笹舟を浮かべたり、水鉄砲やお茶の花の蕾を入れて打つ空気鉄砲を作って遊びました。竹の皮で草履を作りました。」(小平ふるさと物語(一)P2～3、大正3年生の市民からの聞き取り)

オ 「大欒(けやき)のほか、檜(かし)の木などもたくさんあって、大正6年頃、宅地林の用材を使って住居を建てました。～省略～全部自宅の用材でまかなったのです。職人さんは村でこういう仕事をする人がいますから、よそから頼むことはありません。～省略～兎は山(小平では雑木林を指す)にいたから～省略～学園中央通りの西側から向こうは山でした。一橋大から津田塾大の裏にかけて、玉川上水の所までずっと山でした。そこらの山でマツムシ、スズムシなどを採りました。」(小平ふるさと物語(一)P23～24、大正5年生の市民からの聞き取り)

⑤ 昔の森の姿

ア 秩父おろしという冬の強い風に応じるように、屋敷の周囲には樹林が植えられた。ケヤキ、シイ、カシ、スギ等といった防風林である。樹木の配置方向は、北—スギ・カシ・ケヤキ・タケ、西—カシ・ケヤキ・スギ(タケなし)、東—カシ・ケヤキ・タケ(スギなし)、南—ケヤキ・カシ(スギ・タケなし)、スギは北西、北また北東に多く、南にはない。タケは北、東北、東に多く南にはない。しか

しまれに西にはある。カシはどの方向にもある。カシ・ケヤキは母屋の軒先に東西に一行に母屋と平行に植えられている。(郷土こだいらP4)

イ 雑木林の中には、クヌギ、コナラ、クリ、イヌシデ、エゴノキ、ヤマハンノキ、ゴンズイ、ムラサキシキブ、ウツギ、ニガキ、ガマズミ、ヌルデなどがあり、下草として春はシュンラン、キジムシロ、スマレ、フデリンドウ、クサボケなどが咲き乱れる。新緑の頃にはイチヤクサウ、キンラン、ギンラン、クチナシグサ、ウマノアシガタなど、夏にはウツボグサ、ホタルブクロ、ヤマユリなど、秋にはナデシコ、ハギ、オミナエシ、ヒヨドリバナ、リンドウ、センブリ、オケラ、アキノキリンソウが美しく咲きほこっている。(郷土こだいらP13)

ウ 屋敷は青梅海道沿いに位置させ、周囲を防風林として屋敷森で囲み、用水路は飲み水であったため、屋敷の勝手側に配置した。(写真No3本編P10、小川村地割図本編P8～9)

エ 屋敷森に連続して、雑木林を配置し、剪定枝を燃料にしたり、落ち葉の腐葉土などを肥料にしたりしたと思われる。また地割の北端の野火止用水沿いと南端の玉川上水沿いにも雑木林を配置した。(小川村地割図本編P8～9)

オ 屋敷森や雑木林などは、約三世紀半にも渡り継続して管理されたものであるが、その管理手法として、萌芽更新や補植といった手法がとられてきた。

萌芽更新

根株を残して樹木を伐採し、その後根株から生えてくる若芽を何本か残して再び成木へと成長させるプロセスを繰り返す樹林の管理方式。

補植

樹木が枯れて空地ができたとき、再び樹木を植えること。

⑥ 歴史的価値のまとめ

以上のことから、何気なく存在する森が350年前からの開拓の歴史を語るみどりであることや、武蔵野の面影を残す郷土的な風景としてのみどりであったりすることがわかる。

それは長い年月をかけて自然と人間の営みが調和した結果、見た目にも美しい景観ができたものであり、小平らしい森の歴史的価値があるみどり資源として次世代に引継いでいくべきものと考えられる。そこで新田開発当時から存在した小平の森の価値について整理すると、概ね次の8つの要素に整理できる。

ア 武蔵野の新田開発にともなう防風林としての生活環境的要素

イ 薪炭や肥料としての燃料資源的要素

ウ 生活用具や食用としての生活・食料的要素

エ 住宅用材としての建材的要素

オ 儀礼や装飾などの民芸資材的要素

カ 子どもの森としての遊び場的要素

キ 樹林の多種多様な動植物の保全的要素

ク 約三世紀半にも渡り継続してきた森の管理手法

(2) 現代的な価値

小平の森は、歴史的な価値の中でも述べたとおり、日々の暮らしに欠かせないものとして引き継がれてきたものが、結果的に、見た目にも美しい景観となり、更に、多種多様な生物の生息の場のひとつとなっていたのである。現代においては、人口の増加と都市化の進展や化学肥料・石油やガスなど効率的な燃料の普及などにもとない、日常生活に不可欠なものとしての森の役割が失われつつある。そこで歴史的な価値の中でも現代に通じる価値や、新たに評価された価値を再確認するとともに、市民共有のみどり財産として市民が自ら守っていく小平らしい森として再生していくことが必要となっている。

①現在の小平の森の状況

- ア 減少しているが、近隣と比べると、まだまだ武蔵野の名残としての森がある。
- イ 市西部の野火止用水や玉川上水には連続した森が残っている。
- ウ 屋敷森は、数軒の屋敷森を残しその名残を残すのみとなっている。
- エ 森の有益性についての市民の共有意識は高くはない。
- オ 生活に密接に関わったみどりとしての意義はうすれつつある。
- カ 長年に渡り継続されてきた萌芽更新などの管理が行き届かず、古木が中心の森が増えている。

②現在における森の可能性

新田開発から息づいてきた森の価値観とともに、新たなみどり資源としての可能性について考えてみる。

- ア 生産行為として成り立っていた森を、都市のみどり機能として活かしていくことができるか。
- イ 森から発生する資源を環境保全に役立てられないか。また、森を自然とふれあう、学習や教養・文化活動の場として活用できないか。
- ウ 森のプライオリティー(優先順位)を上げるためには、森の有益性を共有できないか。
- エ 小平グリーンロードといった素晴らしいみどりがあるので、森の連携を高めることでポテンシャルを高めることができないか。
- オ 小平のまちのアイデンティティー(独自性)として、生物多様性に配慮した森のあるべき姿を打ち出すことができないか。
- カ あるべき森の姿について市民の方々と共有する仕組みを作っていくことで、失われつつある郷土性を醸成できないか。
- キ 地域固有の歴史や文化を背景にした森を活かしていくことで、個性と魅力のあるまちづくりをすることができないか。

③小平の森の現代的な価値

現在における森の可能性の中から歴史的な価値を踏まえつつ、現代的な価値を整理してみると、概ね次の8つの要素に整理できる。

- ア 生物多様性に配慮することで人と自然が共生できる自然環境的要素
- イ バイオマスの生産の場としての生産的要素
- ウ 地域固有の歴史や文化に根づいた森の歴史文化的要素
- エ 小平の特徴ある景観形成としての景観的要素
- オ 森を守ることにより郷土を知り郷土愛が高まる郷土的要素
- カ 自然との触れ合いを通じたレクリエーションや教育の場としての要素
- キ 地域固有の森の情報を共有した地域コミュニティ的要素
- ク 森の再生のために、萌芽更新などの手法を活用した伝承的保全活動の場としての要素

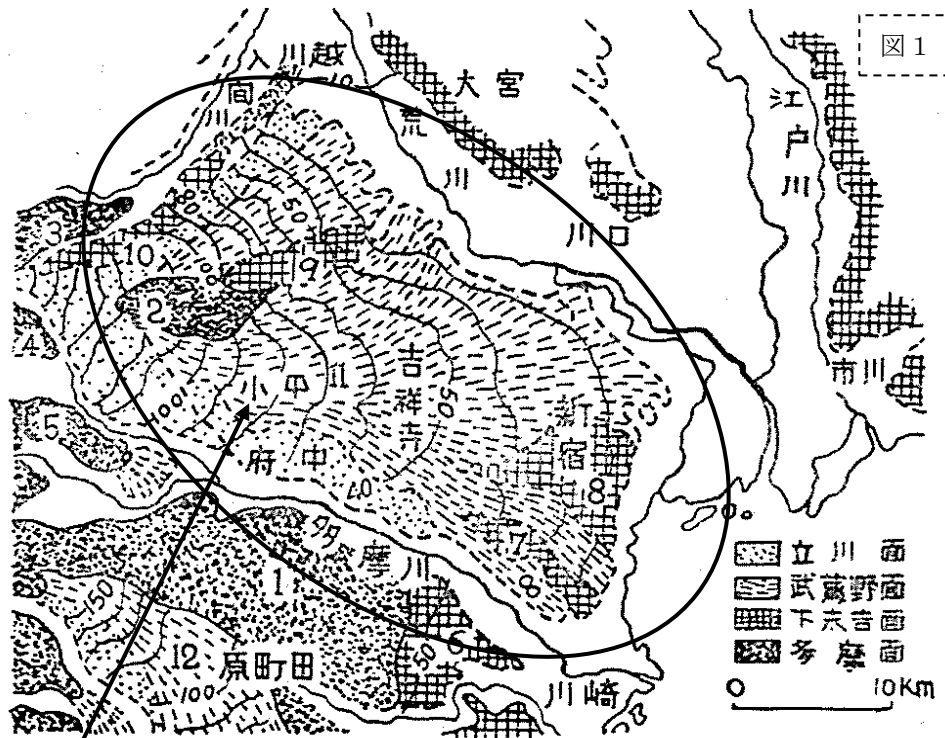
バイオマス

バイオマスは、石油などの枯渇性資源ではない、生物資源(バイオ)の量(マス)をあらわしていて、動植物から生まれた再生可能な資源のことを意味する。従来の薪炭のほか、落ち葉からの堆肥や竹から精製される竹酢液(ちくさくえき)、更に最近では、乗用車・小型トラック用のガソリンを代替するバイオマスアルコール燃料が注目されている。

このような小平の森の現代的な価値を尊重した森づくりが小平らしさを醸成することにもなる。それは、森が街の中に調和し、市民とともに息づいている個性的で魅力がある質の高い小平のみどりを育てていくことを意味するのである。

◇武蔵野台地の範囲

図1 武蔵野台地とその周辺の地形面区分
小平町誌より(P1079)



- | | | |
|----------|------------|------------|
| 1 : 多摩丘陵 | 2 : 狭山丘陵 | 3 : 加治丘陵 |
| 4 : 草花丘陵 | 5 : 加住丘陵 | 6 : 下末吉台 |
| 7 : 荏原台 | 8 : 淀橋台 | 9 : 所沢台 |
| 10 : 金子台 | 11 : 武蔵野台地 | 12 : 相模野台地 |

武蔵野台地の範囲

西北は入間川の、東北と東とは荒川の、南は多摩川に囲まれた一つづきの台地が武蔵野の範囲となる。

◇小川村地割図（小川家古文書より） 図3-1, 3-2

延宝2年（1674年）頃に作成された小川村地割図には、開発当初の地割が描かれている。

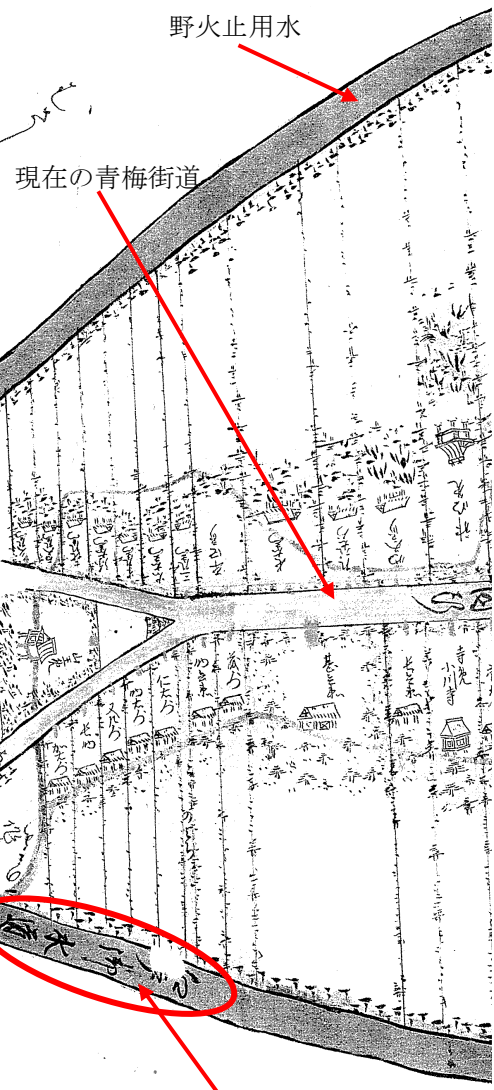
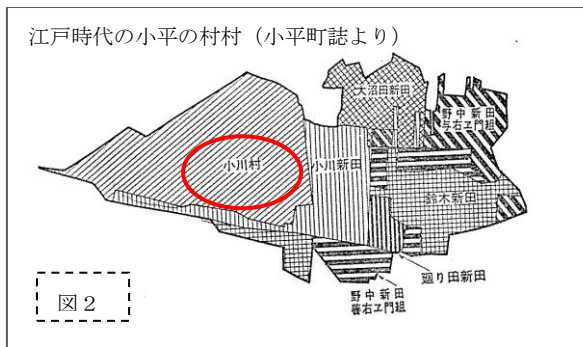
小川村

明暦2年（1656年）小川九郎兵衛の願いにより開発。

小川新田が開発されるまでは、小川村が小川新田と言われていた。

小川新田

享保7年（1722年）小川村の名主市郎兵衛等の願いにより開発。



「はこねがさきかい道」と記載されている。当時は村から箱根ヶ崎に向かう道という意味で記載されている。

「のびどめ水道」と記載されている。

現在の立川通り

玉川上水が「江戸御水道」と記載されており、江戸へ飲料水を供給していたことがわかる。

図3-1

小川村の周りには「むさし野」と記載されている。要するに周辺は野っばらであったということである。



南北に長い短冊型の
地割の様子

野火止用水
用水沿いに連続した
樹木が描かれている。



用水沿いにも
雑木林

畑

屋敷の裏側に
雑木林

小川用水(北側)

屋敷の周辺の
樹林



「同断」と記載されている。
前の記載と同じという意味。
ここでは表示されていない
が地割図の東側延長に「小川
新田」と記載されている。

玉川上水
上水沿いに連続した樹
木が描かれている。

屋敷
屋敷の周りに樹木が
描かれている。

小川用水(南側)
用水は飲み水として利用
されたため屋敷の勝手口
側に流れている。

図 3-2